

雑学 鳥獣植物戯詩

全24回

八木幹夫

第2回【雪の鶏小屋】

雪の降った翌朝は私たちの野性も目覚める。米国の詩人口バート・ブライの詩に鶏小屋が襲われる詩があった。降り止んだ小屋から点々と赤い血と足あとが丘の上まで続く。狐か狼か。その口に啞えられていた鶏。真夜中の狼藉。雪の降り続ける静けさの中の凶行だ。ブライは淡々と鶏小屋周辺の情景を描写するだけだが、そこから捨象されたものが奇妙に蘇る。具体的に事件はほとんど描かれていない。狐も狼も出てこない。残る血痕とけもの足跡だけ。犯人は具体的には不明のまま。読者は昨夜の吹雪の出来事を想像させられる。

雪に血のしたたり遠くけもの道 山羊(筆者の俳号)
一句をものしたくなるが、ブライが描き出した内面性を孕んだ世界に及ばない。ブライは凶行を意識的に描かないことで見えてくる世界を示した。時に表現者は多くを語りすぎる。自戒としなければなるまい。

彼はカナダに隣接するミネソタ州生れ。シンプルな表現で自然を内面化する。一茶や芭蕉の俳句にも詳しい。切り捨てること世界が広がることを知っている詩人だ。現在94歳。詩集に『雪野原の静けさ』がある。